

「総合的な学習の時間」に関する研究 II

—「総合演習」から「総合的な学習の時間の指導法」へ—

渡 邊 均

Study of Integrated Studies II:
From “Integrated Seminar” to “Guidance Methods
for Integrated Studies”

Hitoshi Watanabe

はじめに

2018-2019年度に行われた教員養成課程の再課程認定により、「総合的な学習の時間」の指導法に関する科目の設置が義務づけられ、本学においても小学校教員養成課程の科目として「特別活動・総合的な学習の指導法」が新設された。筆者はその科目内容の1/2、「総合的な学習の時間」の指導法部分を担当することとなった。

これを契機として、前稿「総合的な学習の時間」に関する研究I—大学での教職教育への示唆—¹⁾より適宜、「総合的な学習の時間」と関わる学習開発学的な研究情報を、本学の教員養成に資するよう本論集の資料として提供していくこととした。既に、同種の研究情報はかつての発表論文にも点在するものの、文部科学省の当該科目関連でよりわかりやすく、研究情報としてターゲットを絞って整理・発表する必要がある、そうした要請に応えるための取り組みである。

1. 「総合的な学習の時間」へのこれまでの実践研究上の関与と学習開発学研究への期待

筆者は、公立中学校、国立大大学附属中学校においての実務経験を持ち、平成元年改訂の学習指導要領、平成10年改訂の学習指導要領改訂下での音楽科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間の中学校現場での指導経験を持つ。またその間、校務分掌としての全校の生徒会指導担当を通しての特別活動のカリキュラム開発、総合的な学習の時間の研究開発プロジェクトへの参画経験を持つ。特に当時の学力観や社会構成主義的な学びに関する研究動向及びその研究成果の実践へのフィードバックに積極的に取り組み、学習指導の設計・評価と関わって90年代後半からのプロジェクト学習、真正な評価、教育工学からのアプローチによる生徒の学習の改造を、実践において具現・実証してきた。2001年からは引き続き研究者としての活動の場を本学に移し、教員養成の現場における教育にその成果を生かす活動を続けてきている。

本学での教員養成の現場における研究成果のフィードバックに関しては、着任時の担当科目上、その中心は音楽科の指導法に関する科目においてであったが、その後、研究分野から適性判断を頂き、幼児教育における表現領域の指導法、教職系の総合演習科目、情報処理や情報メディアの活用に関する科目と、学習指導方法の開発に関する科目を情報・メディア系を含めて文科省の資格審査等も経て担当する中で行ってきた。この度2020年度から「特別活動・総合的な学習の指導法」が開設されるに当たり、さらにその役割が広がったことになる。

「総合的な学習の時間」は教育課程の全体的な広がりの中で、他教科・特別活動とも深く関連し学校の教育活動全体と関わるものとなる。特にその展開に当たっては、児童・生徒の主体的な活動により展開されることが期待される「時間」であり、その学習指導にあたっては文化遺産の伝統の継承（知識・技能、他）としての教科型の学習指導とは異なり、学習開発学的な新たなアプローチとなる。教員養成においても平成10年の学習指導要領6次改訂以降、本来はもっと早く対応した科目の設置が必要であったはずである。にもかかわらず、その後の急転直下の「ゆとり教育批判」あるいは外国語科の創設に時間と労力を割いた故か、一部、真正な評価に関する研究に進展を見たものの、全体

的には20年という年月を浪費してしまった観は否めない。しかし、今次学習指導要領の改訂の要点として掲げられた「主体的・対話的で深い学びの実現」や「カリキュラムマネジメントの重視」は、大学教育でも盛んに唱えられる教育の質的転換に向けて、開発学的な教育実践及び研究が加速されることを期待させるものである。

2. 教職教育における「総合的な学習の時間」対応の迷走

初等中等教育における「総合的な学習の時間」は、1996（平成8）年の中央教育審議会対一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」²⁾及びそれを受けた1998（平成10）年の教育課程審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」³⁾で創設が謳われ、1998（平成10）年第6次学習指導要領改訂の告示により、4年後の完全実施に至ることとなった。

高等教育の教職課程においても、同じ中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の内容を受けた1997（平成9）年の教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」により、「人間尊重・人権尊重の精神はもとより、地球環境、異文化理解など人類に共通するテーマや少子・高齢化と福祉、家庭の在り方など我が国の社会全体に関わるテーマについて、教員を志願する者の理解を深めその視野を広げるとともに、これら諸課題に係る内容に関し適切に指導することができるようにするため」として「総合演習」の創設が謳われ、1998（平成10）年の教育職員免許法施行規則の改正により、その内容については、同規則第六条の別表の備考で、「総合演習は、人類に共通する課題又は我が国社会全体にかかわる課題のうち一以上のものに関する分析及び検討並びにその課題について幼児、児童又は生徒を指導するための方法及び技術を含むものとする」とされ、2000年から導入された。

本学でも「教職総合演習」として開設され、2001年に着任後、筆者もその科目を継続担当した。2006（平成18）年中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」により「教職実践演習」の新設・必修化が

謳われ「総合演習」が「教職に関する科目」から外されるまで⁴⁾、2009（平成21）年度入学生まで提供されていた。当時のシラバスを以下に掲載する。

シラバス—教職総合演習 (4)—			
科目名	教職総合演習 (4)	履修年次	2-4
クラス		単位	2
学期	後期	曜限	水曜 1 時限
教員	渡邊 均		
備考			
講義の概要			
【授業の到達目標及びテーマ】			
<p>「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」及び「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること」こうした資質及び取り組み姿勢は、現在の子ども達やその子ども達を指導する教師のみに求められるものではなく、高度化・複雑化した現代に生きる者すべてに求められる資質及び取り組み姿勢でもある。教職総合演習は、こうした資質の養成を目指して、「人類に共通する課題又は我が国全体にかかわる課題のうち、ひとつ以上のものに関する分析及び検討」並びに「その課題に関して幼児、児童又は生徒を指導するための方法及び技術」を内容とする科目として開設される。</p>			
【授業の概要】			
<p>ここでは、将来教師として「総合的な学習の時間」を設計・実施・評価していくことをも視野に入れながら、参加者が現在の社会状況の中から主体的に問題を見出し、その現場に足を運びながらその解決に取り組む演習を行いたい。しかし、学校現場に用意されている時間数に比べれば少ない時間での、そしてまた制約の多い演習となる。「解決」とはいかなくとも入り口に立つことができると考えている。</p> <p>このクラスで用いる接近法の特徴は、「音と映像」というチャンネルでの出力を規定していることである。一見、扱う内容が限定されそうにも思われるが、そうとは限らない。現代的課題に向かい合い、何かを社会にアピールする際の表現方法が「音や映像」を不可欠のものとするだけで、課題内容は参加者の意識の持ち方しだいである。それどころか、表現方法を規定したことにより、既に多様に発表されてきた音楽や映像を、新たに発見や驚きをもって受け止めることが出来るかもしれない。このように「総合的な学習の時間」の中で設定されるあらゆる内容に対して「音・映像思考」は可能で、他とは違う独自のダイナミックな問題解決の方法を提供してくれる可能性を秘めたものなのである。</p>			
【準備学習等についての具体的な指示】			
<p>講義中の指示や WEB シラバスの「講義計画」で、毎回の内容および指示を各自で確認のうえ準備をして講義に臨むこと。</p>			
【授業計画（各回ごとの授業内容）】			
<ol style="list-style-type: none"> 1. 「教職総合演習」における学び（小・中・高等学校、大学における様々な「学び」と比較して） 2. 「音を通しての現代考」の概要 3. 課題の焦点化のために（ブレイン・ストーミングと意見交換を通して） 4. 課題の焦点化のために（グルーピングとグループ課題の構築を通して） 5. 探究活動の設計・実施・評価の進め方、グループマネジメントの方法 6. 探究活動（1）情報検索・収集・整理の方法、及び実施 7. 探究活動（2）フィールドワーク（ステップ1）の設計 8. 探究活動（3）フィールドワーク（ステップ1）の実践 9. 探究活動の見直し（フィールドワークの成果のフィードバック） 10. 探究活動（4）収集データの整理・分析 11. 探究活動（5）映像作品の設計（ムービー・プロジェクトの作成） 12. 探究活動（6）映像作品の製作（ムービーの発行） 13. 凝縮ポートフォリオの作成・発表会準備（ムービーの他発表内容の整理） 14. 自主設定課題についての発表会 15. 総括（評価情報の収集、相互評価会議の実施） 			
テキスト			
適宜、プリントを用意する。			

参考書等
Burke, K., Fogarty, R. & Belgrad, S. "The Mindful School: The Portfolio Connection" (IRI/SkyLight, 1994)
成績評価の方法
発表 (20 点), ポートフォリオ (50 点), 相互評価会議 (30 点) 以上減点法で採点する。この他, 課題の設定及び実施状況により加点要素も設定し, 総合的に評価する。
履修上の注意
開講に先立って配属を決定するので, 掲示に注意し必ず出席すること。 接近法の性格上, 録音機材等が必要となるが, 現段階で利用可能なもの (個人及び大学で準備可能なもの) で取り組める範囲の課題設定をしたい。 現場に向いての学習の機会を重視しているので, 学外へ出かけ課題設定しだいで講演会・講座・公演に参加することもあるが, その際の費用は個人負担。

教育職員養成審議会第一次答申の内容や 1998 (平成 10) 年改正の教育職員免許法施行規則第六条の別表の備考の記述からは, 「・・・これら諸課題に係る内容に関し適切に指導することができるようにするため」や「・・・幼児, 児童又は生徒を指導するための方法及び技術を含むものとする」とし, 同じ中央教育審議会第一次答申「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の内容を受けた初等中等教育における「総合的な学習の時間」であり, 高等教育の教職課程における「総合演習」であることは明らかであった。直接的に「総合演習」が「総合的な学習の時間」の指導のための科目ではなかったにしても (「指導法」として位置づけられたわけではない), 21 世紀を展望した我が国の教育の在り方を見通した際に, 初等教育のみならず高等教育においても同種の課題意識をもって学ぶことを経験し, そしてその中で指導の方法及び技術の学びを含むものとするとしていた点で, 筆者はこの科目の存在を高く評価していた。

ところが, 先に簡単に示したとおり, 2006 (平成 18) 年中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」により「総合演習」は, 1. 使命感や責任感, 教育的愛情等に関する事項, 2. 社会性や対人関係能力に関する事項, 3. 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項, 4. 教科・保育内容等の指導力に関する事項, の四つを教育の内容事項とする「教職実践演習」に取って代わられることとなった。その後, 2016 (平成 28) 年の教育職員免許法の改正及びその後の 2018-2019 の教職課程の再課程認定の際の指導事項に「総合的な学習の時間」の指導法が盛り込まれるまではほぼ 10 年間, 残念なこと

に教職課程における指導事項としては宙に浮いていたわけである。「教職実践演習」の導入期・目的の状況に鑑み、それは新採用教員需要に合わせ全国に養成課程の認可を乱発した結果、教員養成の質の低下を招き、その対策として対症的に「教職実践演習」を導入せざるを得なかった、また、単位数上限の関係から「総合演習」と差し替えざるを得なかった文部科学省の場当たりの施策の綻びが露見した部分であると、筆者は認識している。

3. 「情報メディアの活用」で展開してきたプロジェクト学習

2012（平成24）年からは「総合演習」は開講されず、そこで行っていたほどの学習の開発は、既存の科目で分担されることとなった。教科の指導法科目「音楽科教育法」では、単元開発は既に主要な課題としており、改めてそうした要素を組み込む余地は無く、その他全体的に見渡す中では、小学校教員養成課程の免許取得に関する必修科目ではないが、学校図書館司書教諭科目の「情報メディアの活用」にその余地を見いだすことができた。

当該科目のねらいは「学校図書館における多様な情報メディアの特性と活用方法の理解を図る」とされており、その内容には、「1. 高度情報社会と人間（情報メディアの発達と変化を含む）、2. 情報メディアの特性と選択、3. 視聴覚メディアの活用、4. コンピュータの活用（教育用ソフトウェアの活用、データベースと情報検索、インターネットによる情報検索と発信）、5. 学校図書館メディアと著作権」を含むものとされている。この内容はその大部分が教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目「情報機器の操作」に該当する（本学の場合）「教育情報処理」の内容と重複しているため、「情報メディアの活用」ではむしろ図書館の環境及び情報メディア活用をどのように活用して子どもたちの教科の学習や「総合的な学習の時間」に寄与することが可能か、より単元開発の実際に取り組み科目内容とした。以下にシラバスを掲載する。

シラバス—情報メディアの活用—			
科目名	情報メディアの活用		
担当者名	渡邊 均 (実務家)		
単位	2	履修年次	3-4
学期	後期	クラス	
曜限	火曜 5 時限	教室	1-302
備考	司書教諭資格取得希望者のみ		
実務経験のある教員等による授業科目	○		
授業の到達目標			
<ol style="list-style-type: none"> 1) 社会構成としての学びに関する最小限の知識を獲得し、その基本的な理解を示すことができる。 2) 学習類型「プロジェクト学習」の有する属性とその型について最小限の知識を獲得し、基本的な理解を示すことができる。 3) ポートフォリオ（プロセスフォリオ）アセスメントの仕組みとその意義について最小限の知識を獲得し、その基本的な理解を示すことができる。 4) 「社会構成としての学び」、「プロジェクト学習」、「ポートフォリオ」の基礎的理解から、自主単元プロジェクトを作成し、そこにポートフォリオを設計し学習過程に組み込むことができる。 5) プロジェクト学習の学校蔵書への拡張を意図したスライドショーを作成することができる。 6) アンケート調査及びその集計方法の関係性を理解し、簡単なクロス集計を Excel で実施することができる。 7) 著作権や肖像権あるいは個人情報の問題、学内ネットワークセキュリティーの問題など、事例に沿って的確に問題点を指摘することができる。 			
授業の概要			
<ul style="list-style-type: none"> ・「学び」に関する学習から導入後、プロジェクト学習、ポートフォリオ・アセスメントについて学び、実際に自主構想プロジェクトを作成する。その中ではポートフォリオのデザインの視点からも各段階を捉え、プロジェクトとともにプロセスフォリオも設計する。 ・生徒個々の知識やスキルには大きなばらつきが見受けられる。このような事情も踏まえ、タイピング、文書作成、表計算、プレゼンテーション、ファイル操作、情報検索その他の基本的な概念とスキル習得も兼ねて、ドキュメント作成や簡単なデータの処理法について一通り実習を行う。同時に、図書館における環境構成や情報発信に活用可能なプロダクティブなツールについての実習を行う（PPT、Excel）。 ・なお、本講義担当者は、公立・国立大学附属学校での実務経験を有する担当者である。教育情報処理に関しては教科及び総合的な学習の時間等で ICT を活用した学習開発・研究に開発・研究校において実際に携わった経験を有している。教育機関における現実的な諸環境における制約条件も踏まえ、ICT 活用に関する実践的な視座を提供する。 			
事前・事後学習、時間等			
<p>当該科目は講義・演習科目である。一回の授業につき 180 分の自主学習に相当する学習内容を伴うものである。以下の内容、及び回数分の自主学習を課す授業である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 「社会構成としての学び」に関する英文講読と内容の要約（180 分 2 回） 2) 「有意義な学習」「Computer as a Mindtools」に関する英文講読と内容の要約（180 分 2 回） 3) 「プロジェクト学習」の備える特性とその学習類型に見られる型に関する英文講読と内容の要約（180 分 2 回） 4) 「ポートフォリオ・アセスメント」の基本的な考え方とその具体に関する英文講読と内容の要約（180 分 2 回） 5) 自主単元プロジェクト学習の構想（180 分 2 回） 6) 自主単元プロジェクト学習におけるプロセスフォリオのデザイン（180 分 1 回） 7) 子どもの学習プロジェクトから学びを図書館蔵書に拡張するためのスライドショーの作成（180 分 1 回） 8) Hypermedia 上での Modeling による学習について英文講読と内容の要約（180 分 1 回） 9) プロジェクト学習の蔵書への拡張を促す環境構成について（学習者の特徴を把握する：アンケートの方法）（180 分 1 回） 10) アンケート集計とクロス集計（180 分 1 回） 			
授業計画（各回の授業内容）			
1 回目	社会構成としての学び		
2 回目	有意義な学習と Mindtools		
3 回目	Mindtools の具備すべき条件について		

4 回目	「プロジェクト学習」の備える特性
5 回目	「プロジェクト学習」の学習類型に見られる型
6 回目	「ポートフォリオ・アセスメント」の基本的な考え方
7 回目	「ポートフォリオ・アセスメント」の具体
8 回目	自主単元プロジェクト学習の構想（※課題1）
9 回目	自主単元プロジェクト学習におけるプロセスフォリオのデザイン（※課題1）
10 回目	子どもの学習プロジェクトから図書館蔵書への学びの拡張(スライドショーの作成)(※課題2)
11 回目	スライドショーの発表（※課題2）
12 回目	Hypermedia 上での Modeling
13 回目	プロジェクト学習の蔵書への拡張を促す環境構成とアンケート
14 回目	アンケート集計とクロス集計
15 回目	総括と実施課題の確認
教科書・テキスト	
特に無し。	
参考書等	
1) Heidi Goodrich, <i>Teaching through Projects: Creating Effective Learning Environments</i> , Dale Seymour Publications, 1996.	
2) Kay Burke, Robin Fogarty, & Susan Belgrad, <i>The Mindful School: The Portfolio Connection (The Mindful School Series)</i> , Allyn & Bacon, 1998.	
3) Wiggins, G., <i>Educative Assessment: Designing Assessments to Inform and Improve Student Performance</i> , Jossey-Bass Publications, 1998.	
4) David H. Jonassen, et. al., <i>Learning with technology: A Constructivist Perspective</i> , Prentice Hall, 1999.	
5) David H. Jonassen, <i>Computers as Mindtools for Schools: Engaging Critical Thinking</i> , Prentice Hall, 1999.	
課題の種類・内容	
1) 「社会構成としての学び」に関する内容の要約	
2) 「有意義な学習」「Computer as a Mindtools」に関する内容の要約	
3) 「プロジェクト学習」の備える特性とその学習類型に見られる型に関する英文内容の要約	
4) 「ポートフォリオ・アセスメント」の基本的な考え方とその具体に関する英文内容の要約	
5) 自主単元プロジェクト学習の構想	
6) 自主単元プロジェクト学習におけるプロセスフォリオのデザイン	
7) 子どもの学習プロジェクトから学びを図書館蔵書に拡張するためのスライドショーの作成	
8) Hypermedia 上での Modeling による学習について英文内容の要約	
課題に対するフィードバックの方法	
随時、作業中に行う。 自主学習時は Moodle 上でのファイルの共有、コメントの返信等を通じて行う。	
成績評価の方法・基準	
実施課題作業内容の資質の査定（80%） 課題の発表の際の発表内容の整理と実際の発表の質の査定（20%）	
履修上の注意	

授業第 8, 9 回と授業 9, 10 回で提示される課題とその実施例を後掲資料に掲載しておく。

4. 初期設定としての本学児童教育学科「総合的な学習の時間の指導法」

本学の「総合的な学習の時間の指導法」カリキュラムは、指導内容項目「特別活動の指導法」と合わせ、2020（令和2）年度開設「特別活動・総合的な学習の指導法」の中で以下の内容で準備されている。シラバスを掲載する。渡邊担当部分が「総合的な学習の時間の指導法」に相当する内容である。

シラバス—特別活動・総合的な学習の指導法—			
科目名	特別活動・総合的な学習の指導法		
担当者名	渡邊 均 / 田代 裕一		
単位	2	履修年次	2-4
学期	前期	クラス	
曜限	火曜 1 時限	教室	1-601
備考	23 期以降の新設科目、小必修 22 期以前は履修不可		
実務経験のある教員等による授業科目	○		
授業の到達目標			
<p>①学校教育における特別活動の意義を理解し、「人間関係形成」・「社会参画」・「自己実現」の視点や、「チームとしての学校」の視点を持つとともに、学年の違いによる活動の変化、各教科等との関連、地域住民や他学校、関係諸機関と連携した組織的な対応等の、特別活動の指導に必要な知識・素養を身に付ける。</p> <p>②総合的な学習の時間の意義や特徴を理解し、現実的な社会・生活の課題を探究する学びを実現するために、指導計画の作成および具体的な指導の仕方、並びに学習活動の評価に関する知識・技能を身に付ける。</p>			
授業の概要			
<ul style="list-style-type: none"> ・特別活動の意義、目標、及び内容を理解する。 ・特別活動の指導の在り方を理解する。 ・総合的な学習の時間の意義や、各学校で目標及び内容を定める際の考え方を理解する。 ・総合的な学習の時間の指導計画作成の考え方を理解し、そのために必要な基礎的な能力を身に付ける。 ・総合的な学習の時間の指導と評価の考え方及び、その際の留意点を理解する。 			
事前・事後学習、時間等			
<p>本科目は講義科目である。授業回毎に以下、3 時間相当の自主学習を要する内容を伴うものである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎回の授業に該当するテキスト及び参考書等の当該箇所について、事前に目を通して概要を把握しておくこと（4 割）。 ・各回の講義で補助的に使用したプリント等については（Moodle に掲載される資料も同じ）、授業後に復讐すること（2 割）。 ・学習指導案の作成等が課題となる回もある。その際は、次回の授業までに作成しておくこと（提出方法等については別途指示する）（4 割程度）。 			
授業計画（各回の授業内容）			
1 回目	講義のガイダンス 学校教育における特別活動と総合的な学習の意義を理解する。（担当：田代裕一）		
2 回目	特別活動に関する学習指導要領を概説し、特別活動の位置づけや内容を理解する。（担当：田代裕一）		
3 回目	学級活動（概説および実践事例の検討）（担当：田代裕一）		
4 回目	児童会活動・クラブ活動（概説および実践事例の検討）…教師・保護者・児童の連携（担当：田代裕一）		
5 回目	学校行事（概説および実践事例の検討）…地域社会・関係機関との連携（田代裕一）		

6 回目	特別活動の指導計画…指導案の作成 (担当: 田代裕一)
7 回目	特別活動の模擬指導 (担当: 田代裕一)
8 回目	特別活動の教育評価 (担当: 田代裕一)
9 回目	「総合的な学習の時間」の創設及びその後の実践から、位置づけや内容を理解する。(担当: 渡邊 均)
10 回目	学校独自の特色ある「総合的な学習の時間」の構築方法 (担当: 渡邊 均)
11 回目	個別のユニットやプロジェクトのデザイン手法 (担当: 渡邊 均)
12 回目	「主体的・対話的で深い学び」を実現するプロジェクト学習 (担当: 渡邊 均)
13 回目	設計・評価の観点から、プロセスフォリオ、ポートフォリオのデザイン (担当: 渡邊 均)
14 回目	プロジェクト試案の構想: プロジェクトのデザイン (担当: 渡邊 均)
15 回目	ルーブリックの活用とそれに基づくプロジェクト試案の評価 (担当: 渡邊 均)
教科書・テキスト	
なし	
参考書等	
小学校学習指導要領 (平成 29 年 3 月告示 文部科学省) 小学校学習指導要領解説 特別活動編 (平成 29 年 6 月 文部科学省) 小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間 (平成 29 年 6 月 文部科学省) *WEB 上で参照できます。	
課題の種類・内容	
<input type="checkbox"/> 実践事例の収集・紹介 <input type="checkbox"/> 学習指導の設計・学習指導案の作成 <input type="checkbox"/> 模擬授業の実施 <input type="checkbox"/> 活動の評価及びアセスメント方法の設計	
課題に対するフィードバックの方法	
学習指導案等や模擬授業については学生間で互いにピア・レビュー (相互評価) を行ったり、批評会の中で教員より助言がなされる。また、レポートとして提出可能なものについては後日改めて直接あるいは Moodle などの方法を用いてフィードバックが返される場合もある。	
成績評価の方法・基準	
授業でのスピーチ、グループワーク、課題、最終レポート等による。特別活動と総合的な学習について各 50% で評価する。定期試験期間中の試験は行わない。	
履修上の注意	
課題提出の他、課題を踏まえた模擬授業の実施等、パフォーマンスによるアセスメントなども行われる。教員は学習の評価情報を授業の各回を通して収集する。その都度、課題の未提出や実施課題の未履行となることの無いよう、常々確認すること。	

全 15 回のうち、9 回目から 15 回目まで、7 回で、「総合的な学習の時間」の創設の背景・趣旨、カリキュラム全体の中での位置づけ、実践事例を伴って学校独自のカリキュラム開発法、個別ユニットやプロジェクトの設計法、プロジェクト学習やポートフォリオ・システムの効果的な導入、模擬設計の相互評価等の内容が予定されている。筆者が 2001 (平成 13) 年～2011 (平成 23) 年まで担当した「教職総合演習」と比較しほぼ 1/2 の時間配当である。それに伴い「教職総合演習」の第 5 回～第 12 回の計 8 回で行っていた学生自身による探究活動の実践などは削減した構成とし、「教職総合演習」では「音を通しての現

代考」と環境に関わる特定の分野に焦点を当てたものだったが、今回は「総合的な学習の時間」が対象とする幅広い今日の問題へと対応範囲を拡大し、特定分野の問題を掘り下げることを行わない代わりに、プロジェクトやポートフォリオ・システムの設計法にウエートを置いたものとしている。

5. 初期設定の核となる学習指導の設計理念と設計に使用するツールについて

2001（平成13）年～2011（平成23）年まで担当した「教職総合演習」において、当時から既に最新の研究成果をベースとした学習開発法の情報を提供していた。その際の設計・評価理念に関する情報と、具体的な設計・評価システムに関する情報を具体的に授業の中で学生に紹介する研究を引用しながら簡単に紹介する。

筆者はそもそも音楽教育の分野での認知発達や指導法研究に関心をもっていたため、音楽の認知発達に関する Piaget 派の研究や子どもの音楽表象の生成活動に焦点をあてたハーバード大学大学院の Project Zero の研究成果から、知識や学びの社会構成や多重知能理論、プロジェクト学習や問題解決学習、Authentic Assessment やポートフォリオ評価システム、さらには Mindtool としての ICT 研究や授業設計・評価システムとしての Understanding by Design などから、学習指導の開発のための情報を得てきた。このうち、直接的に授業の中で学生に直接提供する情報はその中心的な部分をピックアップすると以下のような項目である。

1) 学習指導の設計理念 “Meaningful Learning”

社会構成として学びを捉えた際により有意義なものとするために、学校においてはどのような学習活動の位相がより拡大されるように展開されるべきか、Jonassen, J. H. ら（1998）によって提示された情報を主要部分についてコンパクトにまとめ、原文のまま提示した後、解説を加えている。具体的には以下の部分である。

“Our Assumptions About Learning” & “Meaningful Learning: Our Goal For Schools”, in “Chapter 1: Learning With Technology: Technologies For Meaning

Making”, in Jonassen, D. H., Peck, K. L., Wilson, B. G., *Learning With Technology: A Constructivist Perspective*, Prentice Hall, Inc., 1999., pp.2-11.

2) プロジェクト学習の設計法ツール “Teaching Through Projects”

小学生（3-6年生）を対象としたプロジェクト学習に関する包括的な資料としてブラウン大学のDamon, W. とハーバード大学大学院教育学研究科のGardner, H. & Perkins, D. らによって主導されたマザー放課後研究プロジェクトによりとりまとめられたガイドブックの主に1, 2章を活用している。主な内容は以下の通りである。

“Chapter 1 : Defining Successful Projects” & “Chapter 2: Suple Projects”, in Goodrich, H., Hatch, T., Wiatrowski, G. & Unger, C. *Teaching Through Projects: Creating Effective Learning Environments*, Project Zero of Harvard University, 1995., pp.1-57.

3) ポートフォリオ・システムの構築法ツール “The Portfolio Connection”

ポートフォリオの構築に関してシステマティックに且つ、学校での使用における豊富な事例も伴って具体的なツールとして現場の教員、教育コンサルタント、教師教育トレーナー、出版社、大学教員らが関与してまとめられたガイドブック。主に序と結びを学生には情報として提供しながら第1章から10章までの内容を踏まえ解説している。

“Introduction” & “Conclusion”, in Burke, K., Fogarty, R. & Belgrad, S. *The Mindful School: The Portfolio Connection*, IRI/SkyLight, 1994. pp.5-16, 135-154

おわりに

以上、第15期中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」以後、教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」、及び教育職員免許法施行規則の改正による本学における講義科目「総合演習」開設から、学習開発学的な学びをどのように位置づけて継続し、これから始まる「特別活動・総合的な学習の指導法」に組み込もうとしているか、その初期設定に至るまで整理した。

今後も継続的に当該科目の学習活動の開発状況について報告を続けることと

したい。

注及び引用文献

- 1) 渡邊均・田代裕一「総合的な学習の時間」に関する研究 I —大学での教職教育への示唆— 西南学院大学人間科学論集第 16 巻 1 号, pp.227-264
- 2) 21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について (第一次答申), 第 15 期中央教育審議会, 1996.7
- 3) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校, 盲学校, 聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について (答申), 教育課程審議会 1998.7
- 4) 今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申) 中央教育審議会 2006.11

資料一 第 8, 9 回の課題

【学習プロジェクト&プロセスフォリオ設計課題】

I. [プロジェクト設計者として]

1. 次の条件のもとで実行される学習プロジェクトを設計しなさい (プロジェクト学習のフォーマットに依拠して記述すること)。
2. その学習プロジェクトを一定の範囲で確実に遂行しうるプロセスフォリオを設計しなさい (各ステップに, ポートフォリオの 10 フェーズのうち何が意識され, どんな Artifacts を確実に残していくか, ステップ中に記載しなさい)。そして, 必要な物についてはそのフォーマットも作成しなさい。

[対象学生] 西南学院大学に入学したばかりの一年生 50 名「基礎演習」3 週終了後〔実施時期〕入学後 3 週間ほど経過した後の連休前の土曜日 (2 コマ) と, 連休後, 基礎演習 1 コマ。

今年を例に取るならば,

- 1) 4 月 24 日 (水) 1 限 基礎演習 簡単なオリエンテーション
- 2) 4 月 27 日 (土) 午前中 2 コマ 大学図書館 (後半: グループ別活動)
- 3) 4 月 27 日 (土) 午後~5 月 10 日 (金) までに任意の 6 時間, 自主活動
- 4) 5 月 8 日 (水) 1 限 基礎演習 (発表会に向けて...) 全体で集まれる時間
- 5) 5 月 11 日 (土) 午前 自主活動 (3 時間)

午後 発表・展示・批評会 (大学 2 号館 1F 学生ホール)

[活動グループ] コアな自主設定テーマごとに編成される 5 名程度のグループ 10 チーム程度。

[全体としての大目標] ○ 5 月 8 日 (水) 1 限 「福岡の文化・歴史 (みどころ)」(発表・展示・批評会)の実施。

[小限必要なステップ]

- 1) 福岡という地域・環境の中で, 文化的遺産・史跡・資源に関連する具体的な場所・施設を各自の興味・関心をもとにピックアップ。
- 2) 列举された場所・施設をカテゴリごとに 10 群程度にグルーピング。
- 3) 個人の関心に沿って集まり, 場所・施設群 10 群のうちいずれかの場所・施設群について調査するグループを 10 チーム程度編成。
- 4) 対象「場所・施設群」とメンバーが決まったら, 5 月 11 日 (土) 午後の発表方法・スタイルの決定。
- 5) グループでの活動計画 (project)
- 6) (自主活動後?) グループの発表テーマの決定→発表。[より詳細なステップ]
- 7) 「収集と選択 (collect, select)」, 「個性的表現 (interject)」, 「反省・自己評価 (reflect, inspect)」をどの場面で?
- 8) 発表作品・展示物等の作成「仕上げ (perfect)」, 「発表・展示 (connect, respect)」, 「差し替え (eject/inject)」をどの程度?

[発表時利用可能な施設・設備]

- 2 号館 1 階学生フロア

- 掲示板（壁面に沿って必要なだけ）
○テーブル ○プロジェクタ、コンピュータ、音響設備

II. [学習者として]

1. あなた自身が、このプロジェクトの学習者（大学一年生）だとします。既に、あなたは一年生以上に多くの「福岡の文化・歴史（みどころ）」を知っていますので比較的短時間にシミュレーションできるとおもいます。「福岡の文化・歴史（みどころ）」として以下の時間を活用して発表会を迎えます。あなた方ならどのように時間を活用しますか？

- 4月27日（土）午前中1コマ程度大学図書館での調べ学習（後半：グループ別活動）
○その後連休中6時間の自主学习
○5月8日（水）1限 基礎演習（発表会に向けて・・・）全体で集まれる時間
○5月11日（土）午前 自主活動（3時間）
○5月11日（土）午後 発表・展示・批評会（大学2号館1F学生ホール）

2. また、あなた方ならどのようなコアなテーマで、前掲課題I. の〔小限必要なステップ〕3)～6)について、工夫に富み、効果的な発表を計画しますか？

- 3) いずれの場所・施設群か？
4) 採るべき発表方法・スタイル・創作作品は？
5) グループでの「具体的な」活動計画は？
6) 興味を惹く絶妙な発表タイトルは？

資料—1 第8, 9回の課題の実施例

【学習プロジェクト&プロセスフォリオ設計課題】

I. [プロジェクト設計者として]

Overview

福岡という地域や環境の中で、文化的遺産・史跡・資源に関連する具体的な場所・施設について書き出す。書き出した場所・施設をカテゴリごとに10群程度に分ける。個人の関心に沿って集まり、場所・施設群10群のうち、いずれかの場所・施設群について調査するグループを10チーム程度編成する。図書館や現地調べたことを各グループでまとめ、5月11日（土）午後2号館1階の学生フロアで発表する。発表形態は、自分たちが伝えたいことを、発表を見聞きする人にいちばん伝わる方法を考えた上で、決定する。

Goal

「福岡の文化・歴史（みどころ）」(発表・展示・批評)会を実施する。

Learning Goals for Students

- これまで福岡で暮らしてきた学生も、大学進学を機に福岡に来た学生も、これから4年間を過ごす福岡の地域や環境の特徴に関心を持ち、知見を広げる。
○興味関心のある事柄に関する資料集めや現地調査等を通して、知りたいことを明らかにする過程を経験し、学び方を学ぶ。
○各自が調べたことをグループ内で共有し、協力して一つの模造紙やパワーポイント等にまとめる。
○他グループの発表を見る観点を定めたり、フィードバックを受けて改善を試みたりする。
○調べ学習・一度目の発表を受けてのフィードバックの総決算として「福岡の文化・歴史（みどころ）」(発表・展示・批評)会を実施する。

Step1-1: Introducing the project 4月24日（水）1限

福岡という地域や環境の中で、文化的遺産・史跡・資源に関連する具体的な場所・施設について書き出す。「福岡の文化・歴史（みどころ）」(発表・展示・批評)会を実施する。発表当日までのプロジェクト内容（各時間の目標、内容等）を示した計画表を配布する。

Step1-2: Making goals and steps clear 4月24日（水）1限

5月11日（土）の午後、「福岡の文化・歴史（みどころ）」(発表・展示・批評)会を実施するという、全体としての大目標を設定する。実施に向けて必要なプロセスについて明確にする。

Step1-3: Brainstorming 4月24日(水)1限

Step1-1で書き出した項目について発表し合い、列挙する。列挙された場所・施設をカテゴリーごとに10群程度に分ける。個人の関心に沿って集まり、場所・施設群10群のうち、いずれかの場所・施設群について調査するグループを10チーム程度編成する。グループごとに集まり、活動計画を立てる。

Step1-4: Collect/Interject 4月27日(土)午前2コマ・午後4月30日(火)5月1日(水)

(午前中)図書館にて、グループ内で決めた担当パートに関連のある書籍や文献を読み、分かったことを整理する。(午後)調べたことをグループ内で共有し、発表方法を話し合い、決定する。連休中の活動内容を確認する。必要であれば、調査対象の場所・施設への訪問や関係者へのインタビューの許可を取り、連休中に伺う。

Step1-5: Select/Creating a first draft 5月4日(土)5月5日(日)

前回から新たに分かったことや、現地を訪問したことによる発見を、グループ内で共有する。多くの情報から、何をどのような順序で示すのかを話し合い、模造紙やパワーポイントの作成を行う。

Step1-6: Giving and receiving feedback 5月8日(水)1限

各グループが全体に向けて発表を行う。発表を聞く者は、発表を聞いての感想や本番の発表に向けての改善点を、発表を行ったグループに対して行う。発表を行ったグループは、発表を聞いた者からの感想・意見を記録する。

Step2-1: Revising 5月9日(木)

5月8日(水)の全体発表の際に得られた感想・意見を集約する。それらを発表内容に反映させ、より聞き手を意識した発表にする。

Step2-2: Eject/Inject/Making a final draft 5月9日(木)

発表内容に合わせて、模造紙やパワーポイント等を仕上げる。

Step2-3: 実行 5月11日(土)午前

完成させた模造紙やパワーポイント等をもとに発表練習を行う。

Step2-4: Perfect 5月11日(土)午前

通しの発表練習を行って、細かい修正を行う。午後の本番発表まで、最善の発表となるように工夫を重ねる。

Step2-5: Connect/Respect 5月11日(土)午後

「福岡の文化・歴史(みどころ)」(発表・展示・批評)会の本番を実施する。

Step2-6: Reflect/Inspect 5月11日(土)午後

各グループの発表を受けての感想・意見を交流する。それをもとに、グループで反省会后、これまでのプロジェクトの取り組み方に対する自己評価をワークシートに書く。

ワークシートの一例

4月24日(水)実施分

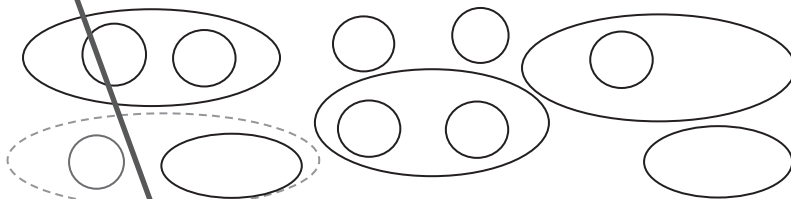
Goal

- ・これから4年間を過ごす福岡の地域や環境の特徴に関心をもつ。
- ・場所、施設に共通項を見つけ、グルーピングする。

興味関心のある、福岡の文化的遺産・史跡・資源に関連する具体的な場所・施設は？

- ・福岡空港、博多港
- ・山笠、櫛田神社

グルーピングしてみよう！（自分の担当するテーマを赤で大きく囲む）



Reflect/Inspect

ワークシートの上部に本時の Goal を、下部に Reflect/Inspect の欄を設けることで、目標を意識した状態で学習に取り組み、振り返りが可能になる。

5月8日(水)実施分ワークシート（点線で切り取り、各グループに渡す。）

Goal

○○グループ

感想・意見

--

--

--

--

--

自分のグループの発表に対する、他グループからの感想・意見

Reflect/Inspect

評価基準

Learning Goals for Students	評価規準
○これまで福岡で暮らしてきた学生も、大学進学を機に福岡に来た学生も、これから4年間を過ごす福岡の地域や環境の特徴に関心を持ち、知見を広げる。	・グループの活動に積極的に取り組んでいるか。 ・自分のグループのテーマについて、発表担当以外のところも理解しているか。 ・自分のグループ以外のテーマについても関心を持ち、知識を深めようとしているか。
○興味関心のある事柄に関する資料集めや現地調査等を通して、知りたいことを明らかにする過程を経験し、学び方を学ぶ。	・文献調査の仕方を理解しているか。 ・様々な視点から、調査対象を捉えようとしているか。 ・今回経験した調査過程を、汎用できるものにしたか。
○各自が調べたことをグループ内で共有し、協力して1つの模造紙やパワーポイント等にまとめる。	・得た情報を取捨選択し、聞き手に伝えたい情報を端的に理解させる発表物になっているか。
○他グループの発表を見る観点を定めたり、フィードバックを受けて改善を試みたりする。	・他からの提案を素直に受け入れようとする姿勢があるか。 ・現状満足せず、発表をよりよくしようとしているか。
○調べ学習・一度目の発表を受けてのフィードバックの総決算として「福岡の文化・歴史(みどころ)」(発表・展示・批評)会を実施する。	・熱意をもって、聞き手に伝えようとしているか。 ・発表会、そして発表会本番を迎えるまでの自らの取り組みを客観的に振り返ることができているか。

II. [学習者として]

1. 日程

○4月27日(土)

前半：福岡と海外の交流の歴史について調べる。

後半：福岡と世界のつながりや外国人を受け入れる場所・施設に興味・関心をもつ人たちが編成されたグループに所属している。そのため、福岡と海外の交流の歴史、福岡空港や博多港、博多駅の歴史について各自調べたことをグループ内で共有する。お互いの調べたことを聞いての感想や疑問について伝え合う。

○4月30日(火) 5月1日(水)

前回、調べたことをグループで共有した際に、さらに調べ学習が必要な内容を調べる。調査対象の場所や施設を尋ね、理解を深める。

○5月4日(土) 5月5日(日)

再度各自が調べたことを共有する。場所や施設を訪れたり、関係者にインタビューをしたりした者は、その内容も共有する。その後、発表内容を精査し、模造紙の作成を行う。発表練習も行う。

○5月8日(水)

模造紙をもとに全体発表する。発表を見聞きしての感想や、発表内容に関する意見を求め、記録する。他グループの発表も聞き、感想や意見を述べる。

○5月9日(木)

昨日の全体発表の際に他グループから得た感想や意見をもとに、発表内容や模造紙の構成を見直す。

○5月11日(土)

午前：発表の最終確認を行う。

午後：発表本番

2. 取り組み内容

1) 個人の関心に沿って集まり、場所・施設群 10 群のうち、いずれかの場所・施設群について調査するグループを 10 チーム程度編成

→ 4月24日(水)実施。まず各自で、福岡という地域や環境の中で、興味のある文化的遺産・史跡・資源に関連する具体的な場所・施設を書き出す。それらを発表し合い、列挙する。書き出した人が多かった場所・施設から、関連施設も含め、グループを作っていく、グループの総数が 10 程度になるようにする。

2) 対象「場所・施設群」とメンバーが決まったら、5月11日(土)午後の発表方法・スタイルの決定

→ 4月24日(水)実施(メンバー決め)。グループを決まった後、教員がグループ名を読み

上げるため、興味のあるグループに挙手する。希望する人数が多すぎる場合は、学生間で話し合って調整する。

→ 4月27日(土)午後実施(発表方法・スタイル決定)。午前で調べたことをグループ内で共有し、調査した内容をいちばん的確に伝えることができる発表方法を選択する。

3) グループの活動計画 (project)

→ 4月24日(水)実施。大まかな調べる内容や発表内容を決め、誰が何を調べたり、発表したかについて決める。5月8日(水)の全体発表と、5月11日(土)午後の発表本番の、2つの目標から逆算して活動計画を立てる。

4) グループの発表テーマの決定→発表

→ 4月27日(土)午後実施。4月27日(土)午後のグループ別の活動を終えた後に、各グループがテーマを発表する。4月24日(水)でグループメンバーが決まった時点で大まかな発表テーマは決まっているが、グループのメンバーが各自調べた内容をグループの他のメンバーに共有したあとに発表テーマを最終決定することで、グループとしての全体像が見えるようになる。

3. 発表する場所・施設群

鴻臚館跡、福岡空港、博多港、博多駅

4. 発表方法

模造紙1枚に発表内容をまとめる。模造紙にまとめるメリットは、伝えたいことが一目見て分かることだ。発表を聞く者が一通りの発表を聞き終えた後も、模造紙を見れば発表内奥を自身で振り返ることができる。

5. グループでの具体的な活動計画

上記1. 2. の通り

6. 発表タイトル

「福岡は、なぜ“アジアの玄関口”と呼ばれるようになったのか」

資料—2 第10, 11回の課題

体験型学習と図書館メディア学習をつなぐ Hypermedia Presentation Application —プロジェクト学習とプロセスフォリオの視点から—

1. アセスメント機会としてのプロジェクト学習及びプロセスフォリオ

これまでの学習においてプロジェクト学習の持つ特徴とポートフォリオによるアセスメントの基本形について概要をとらえてきた。

プロジェクト学習において最も重視されるポイントは、何より学習者側の内発的動機付けに基づいて学習計画から学習者側に委ねられ、その過程としては多様なフィードバックを通して少なくとも2サイクル以上の計画の推敲と遂行が実行され、そして成果としては本人やそれを取り巻く環境にとって何らかの有意義な所産 (products) が共有される点にある。この共有によって学習者にとってより真正は評価が他者からもたらされるわけである。

ポートフォリオ (プロセスフォリオ) が、この学習にいかに関与するかについては、詳細には10の場面で想定されているが、学習者による学習計画の策定の段階から随時その軌跡を残すことで、のちの集積ポートフォリオを作成する段階において、各学習場面での成果物が有益な資料となって蓄積されていくことがプロジェクト型の学習とかみ合いやすいことが容易に見て取れた。

★学習のゴールの設定⇒グループ内到達目標の協議資料

★学習計画⇒学習計画の具体としての企画書そのものが重要な成果物

★収集した資料⇒収集資料・棄却資料のリストは学習の足跡としての成果物

★各場面での振り返り⇒当事者による「振り返り」も貴重な学習情報

★フィードバック収集⇒多様に分られるフィードバック情報も学習を構成するもの

★所産 (作品)・提案⇒ゴールとして設定された所産は第一義的な成果物

★所産 (作品)・提案の発表⇒所産の共有・評価情報の共有により貴重な情報を集積

2. 体験的なプロジェクト型の学習から先人の知恵と結ぶ図書館として

プロジェクト学習は学習者の学習への自己関与の点で魅力的な方法である。ダイナミックである反面、活動自体の時間的な制約により、多様なメディアに出蓄積されている先人の知恵と出会ったとしても、それらを十分に取上げたり深く掘り下げたりする余裕が与えられない場合が多い。ある意味、プロジェクトのゴールとして設定されるものは、一定時間でまとめ上げることが可能な範囲にとどまるわけでそうした面はやむを得ないところであろう。

凝縮ポートフォリオ作成ツールとして可能性を秘めている Hypermedia Presentation Application ツールは、他方、ハイパーリンクの機能により集積・棄却した資料の詳細に更に興味を引く「発展」

をもたすことができる。先人の知恵としては活字メディアに閉じ込められている情報の宝庫である図書館は、学生の体験した活動と先人たちの足跡をリンクさせた情報を発信することで、主体的な学習者の活動に対して多様でまた奥深いバーチャルな経験の世界を提供する。その意味で、学習者自身でも、またそれをサポートする支援者の手によってでも、直接的な学習体験としてのプロジェクトから、メディアの世界に広がる情報へと導くことが期待される。

プロジェクトの中で集積・棄却した資料に注目し、更なる発展的魅力を紹介し知の宝庫としての図書館の蔵書につなぐ取り組みを、現代のメディア環境ゆえに工夫したいものである。

課題

- 誰かに紹介したいと思って選定して来た本について、その内容の魅力をコンパクトに伝えるスライドショーをPPTにて作成しましょう。
- その冒頭には、どんな学習体験をしてきた学習者たちを誘うものか、導入部分を工夫しましょう。ある程度汎用的にも使えるよう意識して作成しておくとう活用しやすいものとなります。

資料一 第8, 9回の課題の実施例, PPT アウトラインと発表内容

総合的な学習の時間

夢のバルーンリリース

を終えて
ふりかえろう

- 9月～ 友達・家族に手紙をかこう
- 10月27日 学習発表会
- 11月～ 未来の自分に手紙をかこう
- 12月～ 夢の手紙をかこう
- 12月17日 全校 夢のバルーンリリース

手紙のその後を想像してみよう

もし、みんなの手紙がこんな人?に届いていたら…

もし、こんな人?が届けてくれていたら…

本

『ほくは アフリカにすむ
キリンと いいます』
作 / 岩佐めぐみ 絵 / 高島純

あらすじ

退屈なキリンから手紙を受けとったペンギン。お互いの姿を知るため、おかしな文通が始まった。とほけた味わいの絵が楽しい童話。

☆先生のおすすめポイント☆

手紙を通じて、キリンが想像するペンギンの姿に注目!

作者について

岩佐 めぐみ

1958年、東京都に生まれる。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業後、1986年まで同大学学科研究室に勤務する。作品に『ほくはアフリカにすむキリンといいます』『わたしはクジラ岬にすむクジラといいます』『オット島のせいちゃんげんきですか?』『おいらはコンブ林にすむブクブクといいます』『パッファローおじさんのおくりもの』『カンガルーおばさんのおかいもの』がある。夫、二人の息子とともに、東京都多摩市在住。

作者について

高島 純

1948年、愛知県に生まれる。愛知教育大学美術科卒業。東海学院大学特任教授。絵本『だれのじてんしゃ』でボローニャ国際児童図書展グラフィック賞受賞。作品は『もしもし…』『白狐魔記』シリーズ、『ピースランド』『おどります』『らくちんらくちん』『わんわんわんわん』『十二支のはやくちことばえほん』、『クジラ海のお話』シリーズなど多数。岐阜県在住。

同シリーズ本も多数!!

情報メディアの活用 (20200107)「図書紹介スライドショー」発表資料

図書紹介『ほくはアフリカにすむキリンといいます』(タイトル) 学籍番号***** 氏名〇〇〇〇

○何年生のどのようなプロジェクト型・体験型の学習に関連付ける図書紹介スライドショーなのか。

全学年の児童が取り組む全校行事に関連させた。しかし、このスライドショーは高学年の児童を対象にしたものである。学習活動自体は全校で取り組むものであるが、スライドショーの内容は、学習活動が将来の自分への手紙を書く内容があったり、詳しい著者についての説明を加えたりしているため、高学年を対象としている。

○そのプロジェクトが特にどういった活動や経験を重要視したものであって欲しいと考えているか。

手紙を書く機会が減っている子どもたちに、他者に配慮した手紙を書けるようになること、他者を思いやり想像しようとする、自分の気持ちや考えを伝えようとする、将来の自分について考えることを主なねらいとしたプロジェクト活動である。2学期中の学習活動を通して、自分の手で自分の思いや相手への思いを伝えようとするのを重要視している。また、手紙をもらう相手の気持ちを思いやり想像するために、この本の紹介を取り入れる。

○スライドショー作成の際の工夫（アニメーションとしての順次性・連続性の視点からの工夫、背景や掲載されたオブジェクトの内容面での工夫）

プロジェクト活動が終わった後の設定であるため、これまでの学習活動をはじめに振り返る。その後、全校行事として行ったバルーンリリースを振り返り、受け取る人がどんな人なのか想像したところで本の紹介にもっていった。本の内容に引き付けられるように、本に出てくる個性的なキャラクターやイラストを重視し、この本読んでみたいという気持ちをもたせたい。その後、本の詳細の説明やあらすじ、シリーズ化された他の本の説明も取り入れた。

○紹介されている図書の内容に関して（スライドショーに含まれている内容からさらに詳しくその本についての魅力を紹介すること）

「ぼくはアフリカにすむキリンといます」というこの本は、ドイツで児童文学賞を受賞している。何冊もシリーズ化され、現在人気の児童文学だそうだ。一人ぼっちのキリンが手紙を書いたことで、今まで見たこともないペンギンに会いに行くことまで発展する。様々な個性的な動物が出てき、やりとりや内容も面白く楽しめる本である。

○子供たちの濃密ではあるが個人的な体験や学習による社会に対する認識が、その図書との出会いによってどのように拡張することを期待しているか。

自分の手紙の行き先を想像したり手紙をもらう相手を想像したりと、前時までのプロジェクト学習をさらに広げるものになっていると思う。手紙を書く際には相手に配慮すること、手紙だからこそのよさに気づいてほしい。